

八甲田山麓における高冷地農業の地理学的研究

斎藤 恵美子

1. はじめに

この研究は、高冷僻地山村で行われるようになった。高冷野菜の生産に関して、八甲田山麓における3地域の場合を取りあげ、その実態及び背景について比較考察し、農業的地域性を明らかにすることを、目的とするものである。方法として、現地における観察・聞きとり・資料収集・計測を行った。

第1図 対象地域の位置



2. 地域の概要

ここで取りあげた八甲田山麓3地域とは、横岳の山腹(600~800m)の沖揚平・楡ヶ峰の山麓(700~780m)の善光寺平・平賀町大木平(450~720m)である。後2者は、国道102号線が近くを走っており、沖揚平の場合は、出荷の際に酸ヶ湯線を利用できる位置にある。

次に、高冷野菜の栽培に関して、土壌と気象状況から、地域の概要を述べる。

土壌的には、沖揚平と善光寺平は、八甲田火山由来の火山灰・大木平は、十和田火山由来の火山灰が母材となった土壌で、共通して表土は、きわめて腐植に富むものの、10~15cmと非常に薄い。また、標高からもわかるように、前2者は強酸性、大木平は弱酸性で、ともに酸度矯正が良く行われている。

これらの地域は、寒高冷地にあたるため、営農期間は、5月初旬から10月中旬と短くなっている。そこで、大木平の530mで県農試が計測した、6~10月(45~49年の平均)の気象状況を見ると、最も問題となる生育限界の平均気温が、15℃となっているため、6月の第4半旬から9月の第3半旬の約90日間は、大木平における高冷野菜の成育期間となる。

現在、栽培されている商品作物は、3地域とも、高冷野菜だけであり、初めて導入されてから現在に至るまでの過程は、各々異なっている。次に、その発展過程の概略を述べる。

長い自給的な開拓地生活の中で、沖揚平が最も早く、昭和34年から高冷野菜が栽培されるが、僻地性が強すぎるため、販路の確保面で順調に行かず、またリーダーのキリスト教牧師が、その後、野辺山開拓地を視察して、沖揚平内で普及に努めるといふ状況であったため、統計的にも特記され

ることがなかった。昭和38年に、中南農林事務所が創設され、その開拓係と牧師は、県の奨励によるビート栽培を実施していた大木平へ、昭和39年に高冷野菜の栽培を普及して回り、同年は好成績をあげる。この普及とは別に、肉牛飼育が安定化していた善光寺平でも、昭和39年に、一部有志が高冷野菜を導入している。同年の好成績が刺激となって、昭和40年、この3地域の他浪岡町と大罾町の各2部落が、開拓係と牧師の全面的な援助によって、「中南地方高冷野菜出荷組合」を組織する。

昭和40年の作付実績は、沖揚平11ha・大木平14ha・善光寺平5haである。この組合は、その後衰退する4部落と異なり、販売ルートを確保するために、3地域にとって重要な意義をもつものである。経営面から主幹作目を、白菜から大根・人参とし、人参については、昭和42年国の指定産地化で、高冷野菜栽培の発展をはかろうとするが、指定は見送られ、停滞を続けることになる。そして、大木平は水田との兼営、沖揚平は依然とした高冷野菜の専作という中で、善光寺平は契約栽培の増加により、ひとり面積・収入を増していく。

その後、昭和47年レタスの指定産地化により、3地域とも、意識的及び作目的にも試行錯誤もなく、高冷野菜の特産地として形成されてきたのである。

3. 土地利用及び営農状況

この八甲田山麓の高冷野菜の特産地3ヶ所について、作目別作付面積・出荷量・労働力構成・土地利用状況などから、地域性を明らかにしたい。

昭和49年現在、沖揚平は22戸、大木平は23戸善光寺平は13戸と非常に少ないのが特徴である。主要作目は、レタス・白菜・人参・大根で、第1表から、沖揚平と大木平は作目的に

第1表 主要作目別作付実績面積(昭和49年)

	レタス	白菜	人参	大根	計
沖揚平	10.0	9.0	28.0	4.0	51.0ha
大木平	12.0	12.7	22.0	7.0	53.7ha
善光寺平	6.3	1.0	7.6	60.0	74.9ha

黒石・平賀地区農業改良普及所の資料より

類似性を示し、人参・レタスを主とした1戸当り耕地4ha前後の中規模経営である。それに対し善光寺平は、1戸当り6haの耕地で、作目的には、大根の単一栽培に等しい状況である。昭和47年の場合で、善光寺平における1戸当農業粗収入に占める経営費の割合は、30%と沖揚平にくらべ10%低く、大規模粗放経営で、最も高い農業粗収入をあげている地域である。

次に、農用機械の所有状況を見ると、沖揚平と大木平は、トラクターなど、中型のものを個人所有する形態となって、共同利用は、作目の比率の関係から、下層農家間で若干ある程度で、あまり

みられない。これに対し、善光寺平は、粗放的な栽培を耐えうる大根の、中でも粗放的な経営が可能な加工用大根の契約栽培となっているため、省力化に最も役立つトラクターなどは、すべて大型で、善光寺平野菜生産組合の所有となっており、共同利用している。また、比較的市場価格がよいため増えている。人参についても、大型洗浄機1台を組合有としている。

このような機械所有状況にある各地域の労働力構成をみると、善光寺平は、20・30代と40・50代が同数で、絶対数的には少ないが、最も恵まれている。大木平は、53人中33人と40・50代が、作業の主体で、その後継者の20・30代は会社勤めをしており、沖揚平は、20・30代が最も多い反面、老人そのものが多く、ほとんど貴重な農業従事者となっており、共に今後問題が発生してくる状況にある。

第2表 作目別系統出荷状況（昭和49年）

	(1ケース5kg入) レタス		(1ケース10kg入) 白菜		(1ケース10kg入) 人参		大根	
	数量	金額	数量	金額	数量	金額	数量	金額
沖揚平	100ケース 382	万円 2,681	100ケース 278	万円 1,914	100ケース 569	万円 4,956	100本 196	万円 100
大木平	275	1,511	216	962	213	1,672	56	12
善光寺平	51	173	41	196	36	254	151 (210t)	1 (631t)

※善光寺平の()内数字は契約出荷分

黒石市農協・竹館農協葛川支所の資料より

次に、出荷内容について説明する。

沖揚平は2haの大根を除き、各作目とも100%の系統出荷で、比重は全く逆転しているが、善光寺平の場合も同じ状況である。一方、大木平は、市場価格・作目によって異なるが、系統出荷・個人出荷・組合出荷と複雑で、昭和49年の場合の系統出荷率は、レタス75%、人参30%、白菜60%、大根2%（契約栽培のため）となっており、これは昔からの特徴で、唯一、すぐ国道へ出る短い舗装道路があるためである。

各地域について、土地利用図を作成したが、ここでは掲載を割愛させていただく。

沖揚平は、南に広い未利用の共有地をもち、利用されているのは、中野川・荒川によって耕地の寸断された、5度前後の傾斜をもつ北部である。豊田地区とよばれる南部は、現在、常盤村との間で開発計画が進行している地区で、1～2度の傾斜で、河川の入りこみがなく、沖揚平全体の $\frac{1}{2}$ ほどの広い面積をもつ、恵まれた自然条件のところである。

北部は、未利用地が多く、ほとんど輪作体系とは無関係の牧草が、広く作付けられており、土地

利用度が低いのが特徴となっている。

大木平と善光寺平には、町当局の政策で、町営牧場が設けられている。

大木平は、高冷野菜畑が西側（標高550mまで）にだけあり、ここは、水田であったところ15haも含まれているなど、周辺に丘陵はあるが、耕地はほぼ平坦である。しかし、各農家の所有する耕地は、非常に分散しており、それに規則性が認められる。

これは、微妙な地形の差を考慮して、公平に配分した結果である。町営牧場がある東南部は、畑には不向の急傾斜である。善光寺平の西部の牧場も同じ条件にある。

善光寺平は、沖揚平と同じく侵蝕谷のため、南側は、全くの利用不可能地となっている。昭和37年に、開墾率100%となり、作物栽培以外の土地は、肉牛のため牧草地にしていたことから、契約量の増加に合わせて、容易に現在のような、大規模経営が可能となったものであり、また、沖揚平と異なり、砂礫が少ないことが幸いした地域である。耕地は3度前後の傾斜であるが、現実には、ほぼ平坦な緩波状丘地で、道路と垂直方向に一筆の面積の大きい短冊型の地割をとっている。（この状況は、大木平の地割と全く異なるものである。）作付比率から、住宅の裏畑には、レタス・白菜・人参を、その後方のさらに大きい耕地には、すべて大根が作付けられており、まとまりをもったその大根畑には、他地域と同様、かんがい設備が整備されていない。

4. おわりに

以上のことから、3地域は、自由式遠郊農業が行われ、異なる経営内容をもつ。都市化の時代にはいり、南東北や新潟が「東京」に変わる市場として、3地域に貢献したことで、発展してきた各地域は、地域に隣接して広い平坦面を、さらに持つことのできない位置にあり、今後発展するためには、輪作体系の確立・未利用地の開発・混合農業化への移行などが必要とされるものである。

参 考 文 献

- 1) 青 森 県 (1 9 6 7、 9) : 青森農業
- 2) " (1 9 7 0、 1 2) : "
- 3) 市川 健夫 (1 9 6 5) : 高冷地の地理学 令文社